



1971

談座会

## 現代美術と全道展

出席／岸本裕躬・小川原脩・峯田敏郎・鎌田俳捺子・栃内忠男  
司会／伏木田光夫

**伏木田** 芸術家がいつも立たされている反省と前進の立場は、集団における全道展も、絶えずくり返してきたことであるけれど、この座談会は反省と前進の接点を、ペールなしに語ってもらいたいし、世界的視野からの美術の問題点も話してもらいたいと思います。

まず、この2、3年の現況として若手の抽象作家が、全道展で目覚ましいといえる新鮮さをもって育っていないのは、どうい問題のためでしょうね。全道展という場にこだわることなく、抽象絵画についてから、座談会の幕をあげたいと思います。

**鎌田** それは全道展だけの問題ではないよね、全般の問題ではないでしょうか。

**小川原** 歴史的には反動期に入っているのではないかな。だから、全道展もそのような形を露呈している。しかし、活躍している人もいないわけではない。

**栃内** 確かに、足ぶみをしているところもある。新し

い方向というのは、抽象という古いジャンルでの分け方とは別のものだけれど、日本人というのは案外、閉鎖的な考え方の要素があるような気がする。そういう要素が、公募展に出品するとき、この一点が良い絵になればということになり、つつこむというより、しがみつく形になったり、精神の閉鎖となって足を引っばる。もっとパーッと出たら、それでいいんだ、またやり直すんだという西洋的ないま、自分のやっている仕事はこれだ、という思い切りに欠けているのではないかな。自分を守るといふ姿勢は、往々にして自分をダメにすることが多いものだ。

**鎌田** それは、確かに創造の本質でもあるけれど、逆に現代のような混流のなかでは、私は逆の感じがする。あまりにも新しいものに飛びつきすぎるといふ社会風潮に対しては、日本人の本質をジックリ見ることが大事になってくる。日本人はいろいろのものを簡単に捨てすぎ

るわ。

**鎌田** 自分のことに対しては、大変無責任なところも風潮として出てきていて、柄内さんの自分を守るという姿勢なんて捨ててしまえという発言が、低次元のものなら反対ですね。

**伏木田** 作家の内的創造性に問題は関わりあってきましたが、鎌田さんどうですか。

**鎌田** 私は、抽象絵画が無くなっていくことは当然のような気がするの。抽象絵画というのは、おかしい気がする。抽象形態と絵画は区別して良いのかも知れない。人間性と絵画性の接点からは、抽象絵画は逃げていくように思うんですよ。

**柄内** 画家の本性としては、視覚的な物体形体と非常に縁が深いですよ。また、物を描写するという一つの本能的なものを持っていないくは画家ではない。そこから一つの創造が生まれるのは、創造の永遠のパターンですからね。しかし、抽象というのも同じなんだよ。

**小川原** ぼくは、抽象というと純粹抽象のモンドリアンやオプゼンファンを思い出す。彼らの画面処理の数理的な世界は、われわれの美術史の中に持っていないものだ。それは非常に異質だ。その根底には黄金分割がひそみ、知性と理性でわり切っている。私はそれに近づくことが出来ない。ぼくの若い頃すでにモンドリアンはあり、モンドリアンはすでに最高の仕事をしてたよ。そのあとには純粹抽象など出てこれないし、仕事をしていくわけにはいかない。

**伏木田** 確かに人間性と純粹抽象の立場からすると、モンドリアンは一つの極を示した作家だと思ふ。しかし、空間ということになると、モンドリアンは出発だと思ふ。

**小川原** モンドリアンは偉大であるが、あれは一つの極であって、終わったんだよ。

**鎌田** モンドリアンは面白くないわ。

**柄内** 小川原さんの立場ならそうだろうな。しかし、モンドリアンは終わっていないよ。見方はそれぞれだけれど。(一同ケンケンガクガク)

**小川原** 僕はアンフォルメールになるとわかるし、情緒的にも入っていけるんだな、人間的であるしね。

**伏木田** 全道展にしても、アンフォルメールの美学を武器として、優秀な一群の作家を送り出しましたからね。僕がバリーの近代美術館で感じたのも、藤田嗣治以後、もつとも日本人の作品で入っているのは、アンフォ

ルメール時代の作家でした。フオーブ、アンフォルメールとこの絵画運動と美学は、日本人の体質や美意識と結びつく内的必然性があるように思いましたね。

しわし、その後のポップアートやオップアートのような世界的風潮と美学を持って登場してくる、優れた新人は、全道展にはまだ出現していない。これは、全道展の体質として受け入れられないのかどうか。

**小川原** 受け入れない体制はないよ。良い作家が出現していないというだけではないかな。全道展の作家は、自己の創造の世界を頑強に切り進んでいるとしても、新しい仕事に対しては自由だし、あらゆる可能性を持っているよ。

**柄内** そうだよ、全道展でバリバリ新しい仕事と冒険を、くりひろげてほしいんだ。

一同 まったく賛成だな。

**鎌田** 新しい空間としてのポップアートは、具象絵画の場合などの作品が、見る人に働きかけるというのでなく、見る人が作品に働きかけて吸いとるということだし、大衆と芸術の接点がとり払われているでしょう。これを絵画と呼んで良いかわるいはわからないけれど、今の芸術は、とにかくそういうところまでいった部分もあるのよ。私個人の姿勢としては、タブロー作家の道を進むだろうけれど、全道展にそういう優秀な作家が出てきてもいいわけね。

**岸本** 今までは作家がいて、作家が徹底的に主体性を持っていたのだが、主体性が変わったのですね。

**伏木田** 小川原さん、ここでさっきモンドリアンにおける、あなたの高い評価と同時に、創作家としては否定の態度をとらなければならなかったと同じように、一個の作家としては、現代にどう対応しているか聞かせてください。

**小川原** ぼくらはね、美術ジャーナリストにつき動かされている。それに画商にも動かされている。ぼくはこういうものに対して、非常に抵抗を感じているね。ぼくは、むしろ倶知安の山の中において「おれは土着する」と心にいつている。だから風土性というとならなくて、「土着」だと思ふ。だから、あんた(伏木田)が日高から出てきたことは、実は残念に思っているんだせ、本当は。そこで土着してやっつけてほしいんだ。おれはバリーに行かなくてもいいんだ。倶知安で生まれて、多少外へ出て、戦後再びもどってきた地で仕事をすればいいんだ。その中で自分というものを、いろいろな方向へぶ



岸本 裕躬



小川原 脩



鎌田俳捺子

つけていくわね。その曲折の中で生きていくよりしょうがない。

**岸本** 伏木田さん、ヨーロッパに1年半行って、どうでした。

**伏木田** 日本人は、一般にはアメリカナイズされているといわれるし、風俗的には確かに一見そう見えるけれど、実際にヨーロッパに住んで日本に帰ってくると、東洋と西洋はまるで生活も美意識も違うことを知りました。美術の世界では、確かにもう世界の問題は共通の場にしばられてきているところもあり、美学や観念は同じところで戦っているけれど、体質や美意識はまるで違いますね。これからは、インターナショナルなものや民族なもの、統合したり離反したりしながらも、明快な意識を、要求されていくのじゃないだろうか。そうになると、風土性の問題もむしろ返されるみたい。

**小川原** それはやはり問題になるね。ぼくの住んでいるところなど、四季じゃなく二季の自然だよ。しかし、風土性なんてのはだまっても出てくるもんだよ。土着性これだな。

**鎌田** 確かに、私も風土性ということは考えるわ。

**柄内** 年だからね<sup>o</sup> (笑い)

**峯田** 風土性などというのは、観念的な毒され方をしているところもあって、北海道は暗くて重いなんて、昔の道展の教科書みたい。風土性など、こっぴどみじんにしていいんじゃないでしょうか。

**柄内** もう少し高い創造の次元で考えることはあって

も、モチーフに雪や灰色の空を描いて、風土性なんていうのは、全然問題にならないよ。

**鎌田** そうね、そんなのはだめね。

**伏木田** 風土性に対しては、近来にない明快な検討をみました。(笑い)

さて、これは前のぶり返しにもなりますが、あらゆるものを受け入れるという全道展に対して、一つの方向性を打ち出していくことはないのか。例えば、今年の春陽会の場合など、タブロー作家集団の姿勢を打ち出しているが、どうですか。

**小川原** それは、今までと同じでしょう。良いものは取るということだよ。

**岸本** いや、前提はそうだけれど、1人1人の中に、それぞれの姿勢があって、どうなっていくかわからないわけですよ。

**小川原** それは審査員個々の主観であって、全道展全体があらたになってどうするという事はない。ぼくらならばよくという、個人で物を見ていく。

**伏木田** かつての独立のフオーブのような絵画運動には、決してなりはしないということですね。

**小川原** 美術運動として? おそらく出てこないだろうね。エコールを作るなんてあり得ないよ。現代では全道展だけでなく、日本の美術団体、みんな似たようなことをしているんじゃない。

**峯田** 現代の公募展の限界説だね。

**柄内** 現代は一番、美術運動のない時代ともいえる。



伏木田光夫



峯田 敏郎



栃内 忠男

岸本 公募団体における、未来像の大きい問題でしょうね。

伏木田 そのへんは、グループ展が一番明快なものを出せるだろうな。全道展など、ズタズタに切りこんでくる。元気のいいのが出てこなくちゃ。ところが、全道展自身を切りつけることになるけれど、この4、5年前から妙に抒情的なものや、メルヘンの世界を描いた人たちが、多くなっているのは、変に生ぬるくて、甘くて、好きになれないんだけど——。

岸本 確かに抒情っぽいですね。女性に特に多いのだけれど……。

伏木田 リアリティーの問題が出てくるね。

鎌田 リアリティーの問題からいうと、全道展の中堅作家や主流作家は、ビリッとしたものを踏まえている作家が多いと思います。ただ、現代美術の現況という視点でみると、例えば万博で車の中にベッドがあったりという作品で、その作家は奇抜だと思ってやっているのに、見る側からいえば驚ろきも新鮮さも奇抜でさえない作品をもって、現代のリアリティーなんていっても、リアリティーは感じません。

私自身は反発を感じるわ。そんなものより、抒情性の方がはるかに新鮮に感じますし、リアリティーを感じます。

伏木田 抒情性ということは、詩の世界などでは、これを通さないと存在しないといっているほどですから、重要なことはわかるのです。ただ、低い次元での、あの

甘えはどうしようもないな。

小川原 土居健郎の「甘えの構造」によれば、英語には「甘え」に適當する言葉がないそうで、「受身的対象愛」という言葉が、それに当てはまると書いていたけれど、日本人は一種独特の甘えを、自己にも他者にも持つようだよ。現実と対決するという状態でなくて、逃避しなければならぬような精神状態が潜在しているので、メルヘンに逃避していく場合もあるんだよ。

ぼくにしても、現実はとても大きくて、そして強過ぎるから、ぼくは田舎に引っこんで逃避する。そういう生き方しかない。それが逆に、現実に対決していく姿勢になっているのだが——。

峯田 そういう作家自身の態度と、もう一つは抒情性が人間回復の手段として、再び表現の翼を持つ時代性も考えられます。絵という一つの作られた画面で、作家は幾何学形体が視覚に、訴えてくるものを通して作画する場合、没個性的な要因から逃がれることができないからそれらに反発する創造の手段として、抒情性を現代は要求しているのではなからうか。彫刻でも塑像部門と彫塑部門と立体造形がわかれたのは、没個性の問題を含んでいるのです。

伏木田 抒情的なもの、メルヘンの世界への傾斜がもつ問題点は、それなりの必然性を持って出てきているのだということが、わかりました。しかし、これは現実と作家の対決の型が鋭くなることにより、一層抒情性も輝やくものであることだけは間違いのないと思います。ぼく

は、野本醇氏や岸本氏の仕事を、そういう意味でも面白いと思っています。ぼく個人の好みからいうと、女学生が色目つかっているような抒情は大嫌いです。

**栃内** 抒情性の問題にしても、明快な意識を持たないとだめだろうなあ。

次にいうことは、抒情性のこととは別なんだけれど、現代の芸術家は、意識をしっかり持たなければいけないと思う。マチスに例をとっても、フォービズムはもう展開できなかつた。ぼくなど、体質的には好きだけれど、彼などはタブローとしての明快な意識で、単純にその道をつきすすみ、色彩のあの限らない美しさを切り開いていったが、そこには美学というはっきりした意識があった。歴史的にみても、印象派は現代で一番美学を持った時代だったし、そのあとのドローネにしてもそうだ。現代絵画は一つの解釈をはっきり示し、また観念の時代だと思う。タブローを作ることすら、19世紀の仕事と見る連中もいて、これだという考えがあって平面から飛び出す立体絵画が出てきたのも、当然だと思う。そして、これまで出てしまった美の領域は、もどるものではないと思う。

**鎌田** これからの芸術運動というのは、絵画と切り離されていくと思うの。絵画といわれなくても人間の芸術運動といえるものじゃない。特定なアーティストだけがやる問題ではなくて、人間であるものがみんな行なうような時代になってきていると思うのよ。絵画、演劇、文学、すでにそうなっていく流れがあるよね。しかし、私は絵画を保っていきたい。さっき話の出た抒情的なもの、私にとっては重要な言葉になっていくと思うの。

**小川原** そうだねえ、何か異ったジャンルのものが出てきて、そのジャンルが分れるか分れないか、新しくできるものを同じジャンルにするか、異ったものにするか。栃内氏がいうように、確かにタブローといえないジャンルができてきた。そして、こういう発言をするときは、明快に自己の立場を表明しなければならないのも現代だ。ぼくは鎌田さんに同感だな、タブローというジャンルを守っていく以外に、生き方はない。

**鎌田** ただし、自己の立場と公募展の立場は、自己と社会との関係と何じように、こういったジャンルの絵も全道展などで受け入れることは、反対でないのですよ。

**栃内** 現実的問題として、今の全道展の会場が10倍広かったら、どんなに良くなるだろう。1人1点主義というのが、出品者の創造活動にどれほどブレーキをかけて

いるか、わからない。そして、内容の停滞や思い切った仕事の足をひっぱっている一面もみられるのも確かなのだから、芸術の本質と離れる立場にも、われわれは目を向けなければならない。

**伏木田** 全道展が今後においても、絶えず自由な仕事と前進の姿勢を示していくことが明快に出て来るので、座談はここで一応終らせてもらいます。

#### —編集者追記

紙面のつごうで、下記の白熱化した座談を取白できませんでしたので、抜粋いたします。

**小川原**—ヨーロッパ美術における印象的なもの、構造的なもの、表現的なものに対する、東洋の暗示的なものについての問題提起。

**岸本**—新しい芸術活動のために、かたやぶりを怖れることなく前進するアウトローについての提起。

**峯田**—現代芸術と古代芸術の接点と再考の提起。

**栃内**—現代絵画における創意と創造のストレートなスピードと、画面におけるもたつきの否定。

**伏木田**—現代絵画のリアリズムは人間の五感を通して感じられ、考えられるものに立脚して、生命感を中心にして考えるべきとの提起。

**鎌田**—全道展における、この2、3年の停滞と、逆行する古くさいリアリズムへの批判と自由の提起。



カット・谷内 丞